群教セ	H01 - 01
	平14.207集

一人一人の幼児が自分のしたい遊びに取り組むための援助の考察

－ティーム保育で収集した情報の活用を通して－

特別研修員　　堀越　美紀　（吉井町立吉井西幼稚園）

《 研究の概要 》

本研究は、ティーム保育で援助した実践に基づいて、一人一人の幼児が自分のしたい遊びに取り組めるため、担任としてどう援助していくべきかについて、考察を加えたものである。具体的には、日々の実践を振り返り、担任が情報を伝え依頼したり、他の教師より協力・援助してもらったりした情報を基に、幼児が自分のしたい遊びに取り組めるために、担任として情報をどう活用し、援助していくべきかについて考察を加えた。

【キーワード：幼児教育　遊び　ティーム保育　情報交換　教師の援助】

Ⅰ　主題設定の理由

幼稚園は、遊びを中心とした生活を通して一人一人に応じた総合的な指導を行う場である。幼児の興味・関心は多様であるため、並行して様々な活動をしている幼児を同時に指導していかなければならない。教育要領において、教師の役割の明確化、ティーム保育の大切さがあげられているが、日ごろより教師同士が連絡を密にし、協力し合うことが大切であると考える。

本園でも、昨年度より３歳児を受け入れた。３歳児のクラスは担任、副担任によるティーム保育編成であるが、４歳児、５歳児は担任が一人のため学級を基本としながらも、その枠を越えた柔軟な指導方法をとることが必要な場面が多く見られる。そこで、全教師が園児全員の顔が分かるよう努め、一人一人の幼児に適切な援助ができるよう心掛けている。このように全教師で全園児を保育していくことを本園では、ティーム保育ととらえている。

担任している４歳児は、13名が新入児、15名が３歳児保育を経験した進級児の混合学級である。３年保育における４歳児は、興味のあることにはすぐに飛び付き自分の思いのままに行動する３歳児と、園の中心となって遊びや行事を進めていく５歳児との狭間で、３歳児ほど教師の手を煩わすことなく過ごせてしまう、しかし年長児のように自分のしたい遊びに取り組めない、という様子が見られる。

担任として一人一人の思いに沿い、自分のしたい遊びに取り組めるような援助に心掛けているが、実際にはある幼児やグループの活動にかかわっていると他の幼児の動きを十分に把握することができず、適切な援助ができないことが少なくない。

そこで、教師同士が協力し合い情報を交換すれば、一人一人の思いに沿った保育ができるものと思われる。

これまでは、朝の打合せの時に心配な幼児の様子を全教師に伝えたり、保育が終わった後の保育カンファレンス（保育研究会）で、幼児の遊びの様子について情報を交換し合ったり、話合いがもてない場合は、必要に応じてメモに残したりと教師が協力し合い情報を共有するよう努めてきた。しかし収集した情報を、どう活用し、援助していくべきかという点があいまいだったと思われる。

そこで本研究において、ティーム保育で援助した実践に基づいて、一人一人の幼児が自分の

したい遊びに取り組めるよう、担任として情報をどう活用し、援助していくべきかについて考察を加えたいと考えた。

Ⅱ　研究のねらい

１学期から２学期において、ティーム保育で援助した実践に基づいて、一人一人の幼児が自分のしたい遊びに取り組めるため、担任として情報をどう活用し、援助していくべきかについて考察を加える。

Ⅲ　研究の方法

１　本園の教育課程14期のうち第５期から第７期の中で、ティーム保育で収集した情報を生かし、援助を行った保育の場面について実践事例を収集する（４月～10月）。

２　事例について下記のように整理し、各事例ごとに考察を加える。

(1)　整理の仕方

○　担任が依頼した情報（ － ）

○　他の教師からの情報（他の教師による協力・援助）（ ＝ ）

○　情報を基に、担任として行った援助（〰）

○　情報を生かした効果的な援助（〰〰）

(2)　考察の観点

ア　幼児の変容（自分のしたい遊びに取り組めるようになったか）

イ　ティーム保育を生かした援助の有効性

３　取り上げた事例の考察全体を通して分かったことをまとめる。

Ⅳ　研究の内容

○　それぞれの期のねらいの基に実践し、上記の方法で収集した事例を取り上げ考察を加える。

事例１　　気持ちが安定し興味のある遊びに取り組めるようになったＡ児

「先生、ダンゴムシ見て。」　（保育の中の偶発的な場面で協力を得た事例）

第５期のねらい

○園生活に慣れ安心して過ごすようになる。

○興味のある遊びを見つけて遊ぶようになる。

幼児の姿と教師の援助	幼児の変容の姿　□は担任の願い、受け止め
・４／14　登園時、Ａ児は母親から離れられず泣いている。担任が泣いているＥ児を抱いているため、昨年Ａ児の姉の担任だったＪ先生が通りがかり「先生いいよ、Ａちゃん見るよ。Ａちゃん、Ｊ先生と一緒にさくらさんのお部屋に行こう。」と泣いているＡ児を抱いて年長組の保育室に連れて行ってくれる。 ＜Ｊ先生よりの情報＞ ・Ａ児は小動物に興味がある様子で、年長組の保育室でＪ先生や年長児と一緒に飼育物を見たり、牛乳パックをもって園庭でダンゴムシ探しをしたりした。	・Ａ児は、登園時母親から離れられず、保育室の前で泣いている。 ・Ａ児は、Ｊ先生と年長組の保育室で過ごし泣きやんだ。 Ｊ先生と過ごし気持ちが安定したのか、泣きやんでよかった。 ・Ａ児は、年長組の保育室で飼育物を見たり、Ｊ先生や年長児とダンゴムシ探しをしたりする。

・４／18　数日にわたり、登園してくるとＪ先生と年長組で一緒に過ごしたＡ児は、「先生、見て。」とダンゴムシのたくさん入っている牛乳パックを担任に見せに来る。 ・「わあ、すごい、たくさん捕まえたね。Ａちゃんってダンゴムシ探しの名人なんだね。今度どこにいるか先生に教えてくれる？」「うん、いいよ。先生も牛乳パックもっておいでよ。」とはりきって答える。担任は牛乳パックをもってＡ児と一緒にダンゴムシ探しをする。小動物に興味があるＦ児も一緒に来る。ダンゴムシは触れるがミミズは触れないＡ児はミミズがいると「Ｆちゃんミミズがいるよ。」とＦ児を呼び同じクラスのＦ児とかかわるようになる。 ・Ａ児と一緒にダンゴムシ探しをしたことをＡ児の母親に話すと、ダンゴムシの入った牛乳パックがいっぱいで、中には死んでしまったものもいることを聞く。 ・４／19　カブトムシの幼虫が入っている飼育ケースを出しておく。ダンゴムシを探してきたＡ児に「お家にもっていったダンゴムシ死んじゃったんだって。この土の中にカブトムシの赤ちゃんが寝てるんだけど、一緒にここをダンゴムシのお家にしようか。そうすれば、Ａ児ちゃんと一緒に餌もあげられるもんね。」「うん、先生ダンゴムシは枯れた葉っぱが好きなんだよ。探してくるね。」と園庭に行く。 ・ダンゴムシの本を出しておきＡ児と一緒に見たり、年長児がポケット図鑑をもっているので見せてもらいに行ったりする。 ・キャベツの葉を食べること、霧吹きで水をあげることを知ったＡ児は、家からキャベツの葉をもってきたり、霧吹きを用意しておくと水をやったりする姿が見られた。 ・新聞紙をかぶせ、暗い所に置いておく。 ・４／30　年長組のＪ先生と年長児がカブトムシの幼虫のうんちとりに来てくれる。飼育ケースの土を広げた新聞紙の上にあける。Ａ児はダンゴムシを見て「先生来て、ダンゴムシが大きくなったよ。」と担任を呼ぶ。「わあ、本当だ。Ａちゃんが餌をあげたり、お水をあげたりしたから大きくなったんだね。」「うん。」 ・その後Ａ児は幼虫のうんちとりの様子を興味深そうに見ており「僕もする。」とプリンの空き容器をもってきて年長児のまねをする。	ダンゴムシ探しに興味を示し喜んで取り組んでいるので、朝も元気に登園してきてほしい。 ・ダンゴムシを担任に見せに来た。 ・Ａ児は、担任と一緒にダンゴムシ探しをする。 ・Ａ児は、ダンゴムシ探しを楽しみに泣かずに登園するようになる。 ・Ａ児は、Ｆ児とかかわりがもてるようになった。 カブトムシの幼虫が入っている飼育ケースならば土も良いし、ダンゴムシの飼育にも適していると思われるので用意しておけばこの中に入れるだろう。 ダンゴムシ探しを楽しみにしながらも、小動物も生きていることを知り、大切にしようという気持ちをもってほしい。 ・Ａ児は、年長組の保育室に行っているので、年長児がポケット図鑑をもっているのを知っていた。 ・担任と一緒にポケット図鑑を見せてもらいに行く。 腐葉土などが入った黒土なのでダンゴムシの飼育には適していることが分かった。 教師は知識に対して応えられることが大切である。

＜考察＞

ア　Ａ児にとっては、今までかかわりのなかった先生よりも、昨年姉の担任で親しみのあるＪ先生と過ごしたことで、気持ちが安定したものと思われる。また、興味のあるダンゴムシ探しをして、たくさん捕まえることができ、Ａ児の得意分野ができた。そのことで朝も泣かずに登園し、自分から進んでダンゴムシ探しをしたり、同じ興味をもつＦ児ともかかわりがもてるようになったりしたものと思われる。また、担任が焦らずにＡ児を温かく見守り、Ｋ先生に任せたことで、Ａ児は担任や同じクラスの幼児とも自分からかかわり、自信をもってダンゴムシ探しが楽しめるようになったものと思われる。

イ　入園当初、特に登園時は、母親から離れられず泣いたり、初めての集団生活で不安だったりする幼児が多いので、担任一人ではどうにもならないことがある。泣いている幼児を他の先生が見てくれることは、幼稚園のこの時期は大切なティーム保育であると考える。また、

この時期は教師と一対一のかかわりを求める幼児が多いので、一人一人の幼児に沿った援助を行うためには、教師が協力し合い、情報交換をしていくことが大切であると考える。

事例２　　教師と一緒に自分のしたい遊びに取り組んだＢ児

「教頭先生、一緒に遊ぼう。」（担任が依頼した情報を基に協力を得た事例）

第６期のねらい

○先生や友達と一緒に自分のしたい遊びに取り組むようになる。

幼児の姿と教師の援助	幼児の変容の姿　□は担任の願い、受け止め
＜担任が依頼した情報＞ ・Ｂ児の発達の姿や興味のあるものなどについては、保育カンファレンスで全教師に知らせ、「話し掛けたり、かかわりを求めてきたりしたら応じたり援助したりしてほしい。」と依頼しておく。	□他の教師もＢ児のことを温かく受け止めていてくれるので、Ｂ児が自分から進んで他の教師にかかわれるようになってほしい。
・６／６　Ｂ児は自転車のかごにボールを入れて押している。職員室にいる教頭先生を誘い、大人用の自転車に乗るよう指をさしている。	・Ｂ児は、職員室にいる教頭先生にかかわりを求めていった。
＜教頭よりの情報＞ ・大人用の自転車に乗り園庭をゆっくり走ると、後からＢ児も自転車を押して一生懸命ついてきたとのこと。一緒に園庭を何周かすると、自転車を置いて朝礼台の方へ行った。	・Ｂ児は、自転車を押して自転車に乗っている教頭先生と一緒に園庭を走る。
・保育室に入ろうとテラスにいるＢ児に「Ｂちゃん、教頭先生が一緒に自転車に乗ってくれてよかったね。給食食べたら一緒に自転車に乗ろうか？」と誘うと、Ｂ児も「うん。」とうれしそうに、うなずく。	・Ｂ児は、担任と給食の後、自転車に乗る約束をする。
・給食を食べるとＢ児は自転車を押してうれしそうに担任を誘いに来る。Ｂ児の自転車の後ろにまたがると、「先生も。」と大人用の自転車を指さす。担任が自転車に乗るのを見ると、Ｂ児は自転車を押しながら走り出す。担任は意図的にゆっくり走り「Ｂちゃん、速いね、待って。」と言うとＢ児は後ろを見てにっこり笑う。時には自転車を押してＢ児の横に行きおしゃべりしながら歩く。Ｂ児が乗るように指をさしているので、今度はスピードを出して走り、途中でＢ児を待っている。	□運動的な遊びをあまり好まないＢ児だが、体をたくさん動かして遊んでほしい。 ・Ｂ児は自転車を押して、担任を誘いに来る。 ・Ｂ児は、自転車を押して自転車に乗っている担任と一緒に園庭を走る。
・Ｂ児と園庭で自転車で遊ぶ中で、「○○ちゃんも自転車に乗ってるね。」と周りの友達にも関心が向くよう声を掛ける。 ・その後、Ｂ児は自転車には乗れないが、補助輪なしの自転車にまたがって足でこぐ姿が見られるようになる。	□自分のしたい遊びに取り組む中で、徐々に友達にも関心をもつようになってほしい。

＜考察＞

ア　Ｂ児は、自転車には乗れないが、自転車のかごにボールを入れて押すのが好きである。年少組の時より職員室で過ごすことが多かったＢ児は、担任が泣いている新入園児とかかわっているのを見て、職員室に行けば教頭先生が相手をしてくれると教頭先生を誘いに行ったものと思われる。その後Ｂ児の好きな自転車に担任も乗り、意図的にゆっくり走ったり、スピードを出して走ったりと変化をもたせたことで、Ｂ児は自分のしたい遊びが楽しめ満足できたものと思われる。

イ　Ｂ児のことは、担任から情報を伝えたり依頼したりしてあるため、他の教師もみな温かく接してくれている。担任としては徐々に友達にも関心が向くようになってほしいと思っていたが、この時期、Ｂ児はまだ教師と一対一のかかわりを求めることが多い。そのため

自分一人と満足するまでじっくり付き合ってくれる教師の存在が必要であり、他の教師の協力が大切であると考える。

事例３　　給食が全部食べられたことがきっかけで、自分が出せるようになったＣ児

「Ｇちゃんもラーメン作る？」（Ｋ先生のメモを通して協力を得た事例）

第６期のねらい

○友達とかかわって遊ぶ中で自分の思ったことや、感じたことなどを行動や言葉で表現するようになる。

幼児の姿と教師の援助	幼児の変容の姿　□は担任の願い、受け止め
・担任が出張で留守の日、保育してくれるＫ先生にＣ児の給食の様子を伝える。たとえ食べられなくても無理強いはせず温かく見守ってほしいこと、側に座って安心させ楽しい雰囲気作りを心掛けてほしいことを依頼する。	たとえ給食が全部食べられなくても、友達と一緒に食べるのが楽いという気持ちになってほしい。
＜ Ｋ先生のメモより収集した情報＞メモより抜粋	
・５／17　給食になると食べる前から「食べられない。」と涙目になっていました。紫いもチップスとヨーグルトを何口か食べただけでした。	・Ｃ児は、給食になると「食べられない。」と涙ぐむ。 ・Ｋ先生に「隣で食べて。」と声を掛ける。
・６／７　「隣で食べて。」と声を掛けてくれました。初めは、ほとんど手をつけなかったが隣のＧ児が「食べてみて、おいしいよ。」と言うときんぴらを一口食べました。	Ｋ先生にも親しみをもってきたようだ。.
・６／21　今日の給食はラーメンと春雨サラダ、Ｃ児は全部残さず食べられました。	・Ｃ児は、初めて給食が全部食べられた。
・６／24　朝、登園して来るＣ児を迎えながら「Ｃちゃん、金曜日、給食全部食べられたんだってね。　Ｋ先生に聞いたよ。すごかったね。先生もびっくりしちゃった。」と言う。 ・Ｃ児はうなずきながら、にこにこしている。	これをきっかけに、給食の時間になっても泣かずに楽しく過ごして、好きなものだけでも食べてほしい。
・「Ｃちゃんは、七夕の短冊にも大きくなったらラーメン屋さんになりたいって書いたんだよね。ラーメンが大好きなんだね。」 ・「うん、お家でも全部食べたよ。」と言う。	・Ｃ児は、短冊の願い事に「大きくなったらラーメン屋さんになりたい。」と書いた。
・６／25　カップラーメンの空き容器を用意する。その中に紙を細く切ってままごとをしているＣ児の所に「Ｃちゃんラーメンができました。」と持っていく。側にいたＧ児が「わあ、ラーメンだ。」と言うとＣ児もうれしそうに、にっこり笑う。	Ｃ児はままごとが好きなので、カップラーメンの空き容器を用意すれば友達とままごと遊びが楽しめるだろう。
・６／27　Ｃ児は家よりカップラーメンの空き容器をたくさんもってくる。「Ｇちゃんもラーメン作る？」と友達に声を掛け分けてやる。保育室で教師のまねをしてラーメンを作ったり、プリンの空き容器でごちそうを作ったりしている。	・Ｃ児は、家よりカップラーメンの空き容器をたくさんもってくる。 ・Ｃ児は、Ｇ児と一緒に空き容器を使ってラーメンを作る。
・給食になるとＣ児は「Ｇちゃん、一緒に給食食べよう。」とＧ児とうれしそうに話をしながら給食の準備をする。	・Ｃ児はＧ児に「一緒に食べよう。」と声を掛け、給食の準備をする。

＜考察＞

ア　初めての集団生活で、好き嫌いの多いＣ児は、給食に抵抗があったようだが、給食にＣ児の好きなラーメンがでて初めて全部食べられた。このことがＣ児にとっては大きな自信になったものと思われる。また、カップラーメンの空き容器で担任がラーメンを作ったことがきっかけになり、Ｃ児は家からたくさんカップラーメンの空き容器をもってきた。これはＣ児の思いに沿った援助の表れだと思われる。このことによりＣ児はＧ児と一緒にごちそう作り

を楽しんだり、G児を誘って給食の準備をしたりする中で、自分の思いを言葉や行動で表現できるようになったものと思われる。

イ　K先生は担任の願いを受け止め、給食も無理強いせず温かく見守ったりC児に接してくれたりした。K先生がC児の様子をメモしておいてくれたことで、心配だったC児の給食の様子がよく分かり、C児の思いに沿った援助をするのに効果的だったと思われる。

事例４　　年長児とのかかわりの中で刺激を受けて長縄跳びに取り組んだD児
「仲間に入れて。」　（L先生の情報をもとに援助を行った事例）

第７期のねらい

○友達や年長児の刺激を受けて、みんなで一緒にする遊びを楽しむようになる。

幼児の姿と教師の援助	幼児の変容の姿　□は担任の願い、受け止め
＜L先生からの情報＞ ・年長児が遊んでいる長縄跳びにD児も加わったとのこと。年中組の女児はいつも参加しているが、D児が加わったのは初めてで、まだ跳び方がぎこちなくリズミカルではないが、年長組のH児の後を追い、すぐに抜けずに何回も取り組んでいた。	・D児は、年長組のH児の後を追い、初めて長縄跳びに加わる。 □D児はいつも一緒にサッカーごっこをしている年長組のH児の影響が大きいようだ。
・10／３　「Dちゃん、年長さんと一緒に長縄跳びしたんだって。Dちゃんが、がんばっていたってL先生が言っていたよ。」「うん、始めはさくらさんのHちゃんとサッカーしてたんだけど、Hちゃんが縄跳びするって言ったから仲間に入ったんだ。でもちょっと難しい。」「Hちゃんは、たくさん跳べてすごいね。Dちゃんも毎日していればHちゃんのようになれるかもしれないよ」と励ます。	□初めてのことは、誘われても「いい。」と取り組まないことが多いD児だが、長縄跳びには興味を示しているので、また取り組んでほしい。
・10／７　女児が長縄跳びがしたいというので、一緒に用意していると「仲間に入れて。」とD児も加わる。	・D児は、自分から進んで長縄跳びの仲間に入った。
・D児の跳ぶリズムに合わせて縄を回したり、縄の真ん中に立つよう「Dちゃんこの丸の中に立って。」と丸を描いてやったりする。立つ位置はよくなったので今度はD児と合い向かいになり両手をもって一緒にジャンプをし「そうDちゃんこの感じだよ。」と体でリズムが感じ取れるようにする。	・D児は担任が描いた丸の中で跳んだり、担任と手をつないで縄があるつもりでジャンプしたりする。 □D児は跳ぶリズムが分かってきたようだ。
・始めはうまく跳べなかったD児も何回も繰り返すうちに跳べるようになる。 ・周りにいた女児が「先生、Dちゃん跳べたね、よかったね。」と拍手してくれる。	・周りにいた女児が、拍手してくれ、D児はにっこりする。
・10／９　年長児のようにクラス用の縄跳びだけでなく個人用の縄跳びを購入する。牛乳パックで作った縄跳び入れに名前を書いたり個人のシールをはったりしてテラスに用意しておく。	□長縄跳びが跳べたことが自信となり、いろいろな遊びに積極的に取り組んでほしい。
・「わあ、年長さんと同じ縄跳びだ。イルカのシールは私のだよ。先生縄跳びしてくるね。」と興味を示した幼児はさっそく遊び出す。 ・D児も自分のマークのうまのシールを探し始める。「あった先生これDの？」「そうだよ、年長さんと同じだね。」	・自分の縄跳びを探し遊び出す幼児を見て、D児も自分の縄跳びを探す。
・D児はうれしそうに自分の縄跳びをもって、年長組のH児の方へ走っていく。 ・その後D児は年長児のH児の後を追いリレー遊びにも参加するようになる。	□年長児のH児とかかわることでD児もいろいろな遊びに進んで取り組めるようになりよかった。

＜考察＞

ア　年中児もこの時期になると友達、特に年長児の姿に刺激を受けて自分もしてみようという気持ちが見られるようになる。D児は、一緒に遊ぶことの多い年長組のH児に刺激を受け、たとえできなくてもH児と一緒にしてみよう、H児のようになりたいな、という思いから長縄跳びに参加したものと思われる。

イ　L先生よりD児が長縄跳びに取り組んでいる様子や、H児とのかかわりについて聞いたことで、D児の気持ちや遊ぶ姿を知ることができた。そこで長縄跳びに興味を示し、自分から取り組んだD児に対して、担任が縄を回す中で、D児に応じた具体的な援助を行うことができた。

Ⅴ　研究の結果と考察

○　事例１のように、泣いているA児をK先生が抱いて、年長組へ連れて行ってくれたことで、A児は気持ちが安定し興味のあるダンゴムシ探しが楽しめるようになった。この時期は園生活に慣れ安心して過ごすようになることが大切である。特に新入児は、登園時、母親から離れられず泣いたり、不安定だったりする幼児が多いので、意図的に年長組の教師は、年中、年少組の泣いている新入児とかかわり、スキンシップを図る中で、気持ちが安定するよう援助したり、情報を伝え合ったりしていくことが大切であると考える。

○　事例２のように、自分のしたい遊びに一緒に取り組むよう誘いに行ったB児の要求に応じ、教頭先生がB児と一緒に園庭を自転車で走ってくれた。B児はまだ教師と一対一のかかわりを求めることが多い。B児のことは、担任が他の教師に発達の姿や興味のあるものなどの情報を伝えたり、依頼したりしてあるため、他の教師も温かく見守ったり接したりしてくれている。そのためB児についての情報は得やすい状況である。他の教師に協力を依頼することで、担任が見ていない場面でも幼児の姿を知ることができ、指導していく上で効果的であると考える。

○　事例３のように、C児が安心して楽しく給食が食べられるようになってほしいという担任の願いを受け止め、K先生が決して無理強いせず温かく見守ってくれた。また、C児の様子を細かくメモしておいてくれたことで、C児の様子を知ることができた。保育が終わった後、その日の保育についての話合いは大切である。都合により話合い（保育カンファレンス）がもてない場合は、形式にはこだわらずメモに残しておくだけでも、幼児を理解する手がかりとなり、大切であると思われる。

○　事例４のように、D児は年長組のH児に刺激を受け、H児が長縄跳びに加わったのをきっかけに、D児も初めて長縄跳びに参加することができた。この時期は、友達や年長児に刺激を受け、自分もしてみようという気持ちが育ってきているため、D児も長縄跳びに参加したものと思われる。L先生より、D児の長縄跳びの取組の様子やH児とのかかわりを聞いたことで、担任として、長縄跳びで立つ位置に丸を描いたり、手をつないでジャンプしたりとD児に応じた援助をすることができた。また、H児の影響が大きいので年長児と同じ個人用の縄跳びを用意するなどD児の思いに沿う援助をすることができた。学年の枠を越えた幼児同士のかかわりが多く見られるようになってきているので、教師同士も情報を交換し合ったり連携を図ったりと協力し合うことが大切であると考える。

Ⅵ　研究のまとめと今後の課題

今回、ティーム保育で援助した実践に基づいて、一人一人の幼児が自分のしたい遊びに取り

組めるため、担任として情報をどう活用し、援助していくべきかについて考察を加えた。その結果、次のことが分かった。

○　入園当初は、気持ちが不安定な幼児が多いため、担任だけでなく、全教師で協力し合い泣いたり不安定だったりする幼児にかかわったり、その様子を伝え合ったりすることが大切である。その情報を生かし、担任としてどうしたら気持ちが安定するのか、何に興味があるのかなど幼児の思いに沿った援助を行うのに有効であることが分かった。このように幼児の発達の姿や期のねらいに応じた援助やティーム保育が大切である。

○　担任が一人一人の幼児の成長、発達に応じた願いや課題をもち、それが達成できるよう情報を伝えたり、依頼したりすることで、他の教師より必要な情報や保育の中での協力を得ることができ、幼児の実態に即した手だてを考えたり、援助を行ったりするために効果があることが分かった。また、他の教師からの情報を活用することで、担任が見ていない場面でも幼児の姿を知ったり、幼児理解をしたりする上に有効である。

○　保育が終わった後や、時には保育の場面において情報を伝え合うことは大切である。しかし、話合いがもてない場合は、幼児の様子をメモしておくことで、担任はその時の様子を知ることができ、メモをもとに幼児の思いに沿った環境を整えたり、援助を行ったりするための手がかりとして活用でき、大切であることが分かった。

○　今回の研究を通して、ティーム保育で収集した情報を、担任としてどう活用し、援助していこうかという前向きな姿勢や態度が大切であることが確認できた。

○　今後は、情報交換だけでなく、全教師が話し合いをもちながら、指導計画を作成したり、教材研究、準備を含めた環境構成をすることが大切であると考える。また保育が終わった後での保育カンファレンス（保育研究会）の充実や、話合いがもてない場合のメモの工夫をしながら実践を積み重ね、一人一人の幼児が自分のしたい遊びに取り組めるための援助ができるよう努力していきたい。

＜主な参考文献＞

・秋田　喜代美　著　『教師のさまざまな役割、共に学び合う教師と子ども』
新しい幼稚園教育要領と実践事例集４　　チャイルド本社（2000）
・小田　豊、神長　美津子 著 『ティーム保育と個性の伸長』　　幼稚園じほう　（2001）